

町史のひとこま

(第二十五回)

須恵の眼科医 ④

― 目養生の記録 ―

眼療を乞う人数千人

上須恵の眼科医・田原家のもとへ、全国から治療を求める患者がかけつけていたことを、江戸時代の地誌「筑前名所図会」(奥村玉蘭著)は次のように書いています。

▽田原氏の宅 上須恵村田原氏の祖は養下という。眼療医にして、其の名海内(―日本国中)に高し。三都(京都・江戸・大坂)は云うに及ばず、東は奥州西は薩摩より、眼療を乞う人、常に数百万人、来たりて寓居す。

このように、繁華を極めた京都・江戸・大坂から筑前まで治療に来る人があったことがわかります。中には奥州(陸奥、青森県)から来る人もいました。

その頃の旅行の不自由さや交通事情を考えれば驚くべきことです。

「名所図会」では、続けて、「此の須恵村は、山里の片田舎なれども、正明膏あるがゆえに都会の地のごとく繁昌せり」と言っています。ここで言う須恵村は上須恵村をさしているのです。

全国から患者を引きつける須恵村の秘密、それを「正明膏あるがゆえ」と言うのは、正明膏が当時に高い評価を受けていたかを思わせませす。

広瀬淡窓の日記から

日田の広瀬淡窓と云えば、高野長英や大村益次郎などすぐれた弟子たちを多く輩出した私塾・咸宜園の先生として有名です。多数の塾生の切磋琢磨、試験に

よる進級制などユニークな教育で知られた淡窓ですが、淡窓二十八歳の日記に当時の上須恵村のようすが記されています。

▽文化六年(一八〇九)五月 予(―自分)、既に須恵に至り、藤助というものの家に投宿す。翌朝、田原氏を訪うて診察を受けたり。……

九月 須恵の人家数十。皆、農戸にして、兼ねて旅人を留むることを業とせり。田原氏大医にして、四方より来り留まって治を乞う者多し。此の時も旅人七、八十もあり、藤助が家にも、十余人ありて同宿せり。……予、須恵に留まること三十日。……

治療の費用もかさんだはずで、武士階級や庄屋クラスなどでないと、おいそれと治療にも来れなかつたのではないのでしょうか。淡窓の泊まった藤助の家には十余人もの同宿者があつたと言いますから、かなり大きな家だつたはずですよ。

数えうた

酒殿の案浦イネという人が、上須恵に目の治療に来た時につくつた「数えうた」があります。当時(明治時代でしょうか)の診療の様子がよくわかる内容です。

- 一、一人来られぬ連れられて お目をば押さえしおしおと 上須恵村をば訪ねくる
- 二、古き昔も今とても 変わらぬ目医者 は田原様 訪ねて来るのが諸国から
- 三、さても退屈旅の空 右も左も皆他人 居ると思えば辛気なや
- 八、宿の亭主に手を引かれ 田原様へと連れて行き 診察なされて連れ帰る



患者を診察に連れて行くのは宿の主人の役目だったことや、朝八時過ぎに、治療開始を告げる鐘の音がなっていたこと、田原眼科に見てもらおうのが患者にとつて最後の頼みの綱だったことなどが、数えうたにあらわれています。

(町誌編集委員会事務局・石瀧)